摂播歴史研究

第97・98合併号

目　次

石の宝殿三題
……清水一文
(1) (2) (3) (4) (5) (6)

龍野における野見宿禰墳墓の「発見」と神社創建計画について
……關口洋介
(7) (8) (9) (10)

石の宝殿三題

清水一文

はじめに

石の宝殿は、兵庫県高砂市阿弥陀町生石にある生石神社の御神体となっている石造物で、竜山山地の中央、宝殿山（標高六五メートル）の中腹、標高三八メートルにある。山の斜面の岩盤を掘り込んで、直方体を造り出し、後面に突起がつく形状の巨石遺構である。

生石神社は、宝殿山斜面を境内として、江戸時代の本社・詰所・絵馬殿等の堂宇を築き、大大穴牟遅命（生石子大神）と少毘古那命（高御位大神）の二神を祀っている。

本稿では、石の宝殿の製作に係る実態と、生石神社として信仰の対象として古来より崇められてきた経過、そして過去に催行されていた祭礼の、各三題に関する私なりの知見を述べることとする。古代、中世、近世にわたって永続して現代まで存在してきた、石の宝殿と生石神社の歩みを振り返る。

一　石工技術

竜山石の利用　竜山山地では、古墳時代から一七〇〇年以上にわたって、採石活動が営まれてきた。時代ごとに流通や用途を変化させながら、竜山石が利用され続けてきた。

竜山石は、三世紀後半から四世紀にかけて築かれた、前期古墳の石室材として最初に用いられた。四世紀後半から五世紀の古墳時代中期には、竜山石で作られた長持形石棺が、畿内の大王墓や地方の首長墓に用いられた。六世紀の古墳時代後期から七世紀の飛鳥時代にかけては家形石棺が作られ、東は滋賀県、西は山口県まで流通した。飛鳥・奈良時代には、宮都や寺院の礎石などに利用された。「大王の石」や「王墓の石」とも呼ばれ、特別な石材としてブランド化し、倭王権の息のかかった石となっていたと考えられている。

古墳時代の石工技術　竜山石を山から切り

図1　石の宝殿と生石神社・竜山石切場

発行所　摂播歴史研究会
〒676-0004 高砂市荒井町千鳥二丁目二三―一二
電　話　〇七九―四四二―〇六五八
ＦＡＸ　〇七九―四四二―一六五八
振替口座　〇一一〇〇―六―五八九〇九
※　研究機関・学会・図書館等には無償で送付しますのでお申し込み下さい。